

第 96 回全国高等学校ラグビーフットボール大会和歌山県大会

平成 28 年 10 月 3 0 日 ・ 11 月 6 日

於 紀三井寺公園陸上競技場

平成 2 8 年 1 0 月 3 0 日 準々決勝 熊野高校 VS 那賀高校 5 2 - 1 2 ○勝利
1 1 月 6 日 準決勝 熊野高校 VS 和歌山工業 3 - 4 4 ●敗戦



3 年ぶりの花園出場を目指し、選手・スタッフ・保護者が一致団結して大会に臨みました。

那賀高校戦は全国予選の初戦ということで、選手全員の表情・動きが硬くウォーミングアップからミスの連発、試合に入ってから気持ちも切り替えられず、熊野高校が本来持っているリズムに乗ることができずに初戦を終えました。

初戦の反省を踏まえ、次の日からは準決勝で対戦する和歌山工業戦に向けた準備を徹底的に行い、まずは【ウォーミングアップの精度を高める】ことから取り組みました。ラグビーというスポーツは、選手一人一人の精神状態によって結果が大きく左右されるスポーツであり、個々の素晴らしい選手が多く集まったチームであっても、まとまりや団結力に欠けていたり、その日のメンタルが整っていなければ持っている力を半分も出せずに終わってしまうこともあります。

日々、試合を想定した練習をすることが大切である理由は、『試合当日でも緊張せずにいつも通りのプレーをするため』であり、『練習は試合のように、試合は練習のように』という言葉があるように常に試合を意識した強度や緊張感を持った練習を積み重ねることで、試合で 100% のパフォーマンスを発揮するためです。和歌山工業戦に向けた一週間は本当に良い準備ができました。選手達の表情も明るく、早く試合がしたいというような雰囲気まで出ていたと思います。

準決勝当日、この一年で一番のウォーミングアップができました。それは何故か？

もちろん選手達が一週間ウォーミングアップの練習に全力で取り組み、その後の練習も一つ一つが全力で精度が高かった故に自信を持って紀三井寺競技場に乗り込むことができたということも一つの要因だと思います。しかしそれだけではなく、選手一人一人の『覚悟と大義』の部分も明確になったからではないか、と私は感じる事ができ、ラグビー日誌を読んでも春～夏頃に書かれていた内容と九月に入ってからの内容は明らかに違うものとなっていました。

『お世話になった方々のために』 『育ててくれた親へ恩返しをしたい』 『マネージャーを花園に連れていく』

今大会の結果は、決勝にも行けずに悔しいものとなってしまい、スタッフ側としても今回の敗戦から沢山の宿題を頂きました。

この経験をチームとして次に繋げられるよう、人間としてラグビー選手として一人一人が成長し、ひたむきに泥臭くプレーし応援してくれている方々を笑顔に出来るようなチームを目指して精進してまいりたいと思います。

三年生には心から『お疲れさまでした。そしてありがとうございました。』と感謝の言葉を送りたいと思います。四月に私が赴任してから半年間しか一緒に出来ませんでしたが、心身共に成長してくれました。

この半年間、私は三年生にプレッシャーをかけ、グラウンド内外で厳しいことを要求し続けました。

その理由としては、三年生は【チームの鑑】であり二年生や一年生・熊野高校生の模範や手本であるべきである、と考えており、『人間力の成長』や『憧れの先輩になること』で、応援される個人・応援されるチームとなり、それが勝利という結果に繋がることを知って頂きたかったからです。日を重ねるごとに三年生には自覚が生まれ、他人に気配り・心配りが出来る学年になり、数々のプレッシャーを乗り越えながら、『思いやりの心』がこのチームの象徴になっていました。新チームになっても三年生が残してくれたレガシーを必ず引き継いでくれると確信しています。

最後になりますが、日頃より熊野高校ラグビー部を応援して頂き誠にありがとうございます。

今回の結果を真摯に受け止め、ラグビーが出来る事に感謝をしながら応援してくれている方々や熊野高校の試合を見て頂いた方々に勇気と感動を与える事が出来るチームになれるよう日々鍛錬していきたいと思います。今後ともご声援のほどよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

熊野高校ラグビー部コーチ 吉田大樹